
それはまるで星のよう

長谷川ちず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それはまるで星のよう

【Nコード】

N0734Z

【作者名】

長谷川ちず

【あらすじ】

ある日の朝、友達の鈴木君は登校するなり訊いてきた。

「青春とはなんだろう?」

これは僕と鈴木君の『青春探し』の話。

プロローグ

「さて佐藤氏、ここで問題だ」

「え？ いきなりなに？」

「青春とはなんだろう？」

少し気怠い朝、教室に来るや否や、鈴木君は黒い太縁眼鏡を上げながらそう切り出した。

「せ、青春？」

「そう、青春だ。青い春と書く、あの青春だ」

「えっと……よくわからないけど、部活で大会優勝を目指したり、か、彼女と学校生活を過ごしたりとか……？」

「ふむ。確かにそれは青春っぽいな。では部活に入らず、彼女もいなければ青春はできないのか？」

「それは違うんじゃないかな。他にも色んなことで青春してる人もいると思う」

「その色々とは？」

「う、うーん……」

部活や恋愛だけが青春だとは思わない。でも、その他のことを訊かれても、とっさには何も思い浮かばなかった。

「やはり、な。青春というものは、言葉こそよく知られているが、その実態を知る者は少ない。だが佐藤氏、一つだけ確実にわかっていることがある」

鈴木君は自分と僕を交互に指差す。

「俺も佐藤氏も、青春していないということだ」

「……あー、それは確かだね」

言われるまでもないことだった。なんとなく胸に刺さるものを感じる。ダウン寸前の僕を救うゴングのように、チャイムが鳴る。

「む、続きは後にしよう」

「まだあるの……？」

「むしろ本題にすら到達していない」

「えー」

「では、また後でな」

席に向かう鈴木君を、僕は机に伏して見送った。

ショートホームルームに続いて一時限目の現国が終わる。次の時間に使う物理の教科書と、ついでに読みかけの文庫本を出して、しおりの挟まったページを開いた。

「ライトノベル、実に便利なアイテムだな」

「うわっ！」

突然伸びてきた手に本が奪い取られる。鈴木君は空いている手で眼鏡を上げると、僕の本に目を通した。

「ふむ」

「か、返してよ！」

咄嗟に奪い返そうとするも、鈴木君は本を高く上げてかわす。「読書中だから一人でいてもおかしくない。しかもこうしてブックカバーを付けていれば、一見ただの小説だ。知的で真面目な雰囲気を出せる」

「そ、そんなこと……!!」

「なに、恥じることはない。俺もよく使う手だ」

鈴木君は本を閉じて机に置く。しおりはでたらめに挟まれた。

「しかし、現状に満足してはならない。佐藤氏よ、周りを見てみる。そう言っつて鈴木君は僕の頭を掴んで回した。見てみると言われても、特別変わった何かがあるわけじゃない。いつもの休み時間のワンシーンだ。

少し卑猥な話で盛り上がる男子達。

最近流行りのアイドルグループに黄色い声を上げる女子達。

友達に借りた物理の宿題を必死になって写す人。

教室の隅で何かを囁き合い、笑みを交わす学内カップル。

取り立てて、今更注目するところなんて。

「どうだ、何の変哲も無い、平凡な日常だ。それなのにどうして、俺達はあるの中にいないのだろう？」

「それは……」

「佐藤氏よ、我々は直視するべきではないか？ 我々の立ち位置と
いうものを」

鈴木君は再び僕の頭を回すと、インドア派特有の真っ白な顔を近づけてきた。

「ちよっと、近い、気持ち悪いよ」

「ふむ、気持ち悪いのはお互い様だが、確かにこれはやめておこう」
鈴木君はようやく僕の頭を離して、不健康そうな顔を遠ざけた。

「さて、話の続きだが、佐藤氏は自分の立ち位置を客観的に見られているか？」

「立ち位置っていうのは？」

「もちろん、クラスでのポジションに決まっている。そうだな、わかりやすくランクにしよう。クラスがAランク、以下Dまでの四つの内、自分はどこだと思おう？」

「AからDで？ うーん……」

もちろん、Aじゃないのはわかっている。そんなのは考えるまでもない。

ならBかというところ、それも違う。

Cはどうだろう？

机に置かれた、ブックカバー付きのライトノベルを見る。

「僕は、Dかな」

「残念、ハズレだ」

即答だった。思わず、Dと答えた苦笑のまま固まってしまふ。鈴木君は眼鏡を上げて腕を組む。

「いいか佐藤氏、我々はCだ」

「で、でも鈴木君はさっき、僕達は最下層みたいな言いようだったよ」

「最下層、か……。或いはそっちの方がまだ良かったかもしれない」
「なに？ どういうこと？」

「ふむ、佐藤氏よ」

鈴木君は急に囁くように声を落とした。

「佐藤氏はいじめられたりしているか？」

「え……？」

「俺の知る限り、そんなことはないと思うが」

「う、うん。そういうのはないよ」

「そうか、ならいいんだ。いいか、Dランクとはクラスの最下層になる。それはつまり、いじめられっこのことだ」

「あ、そ、そっか」

「我々はいじめられてはいないし、当然クラスを中心でもない。加えてBというほどクラスに馴染めてもない。故にこだ」

断言されると、自分の立ち位置がこだということがすんなり納得できた。なんとというか、しっくりくる。

「あれ？ でもさっき、鈴木君はDの方が良いかもって言ってなかった？ 僕にはそう思えないんだけど」

「今は、な」

「今は？」

「我々は永遠に学生ではいられない。二年と少し経てばこの学校を卒業し、さらに二十年三十年、もしかすると百年は生きるかもしれない」

「百年はちよつと……」

「ふむ、少し言い過ぎた。とにかく、長い年月を過ごすことになる。そして、ふと過去を顧みるのだ。あー、あの時は……と」

年老いた自分を想像してみる。場所は縁側で、手に湯呑みを持っているのは定番通りだ。

「そういうこともあるかもね」

「しかしだ、年老いた我々は重大なことに気が付く。そういえば、特に思い出すような出来事はないということに」

「あ……」

「それならば、思い出せることのあるいじめられっこの方が良いでしょう。」

鈴木君の言う未来はあまりにも寂しすぎる。何のために生まれたのか、そんなことを考えながら死んでいきそうだ。

「そこで朝の話になる」

「朝のつて、青春の話？」

「そうだ、青春だ。俺は今、青春したくてたまらない」

鈴木君は窓から空を見上げてそう言った。

「な、なに？ そんないきなり」

「実は先週の金曜日にこんなことがあった」

遠い目をして鈴木君は語り始める。

「テレビで、某耳をすます映画を放送していてな、それを見たんだ」

「うん、それで？」

「以上だ」

「うんうん……って、それだけ？」

「そうだが」

「遠い目なんてしてるから、何かすごいことがあったのかと思ってたよ」

「ふむ、すごいことはなかったが、効果は抜群だった」

「ああ、そう……」

力が抜けて、僕は机に伏した。確かにあの映画を見ると、すごくむずむずするというかそわそわというか、そんなよくわからない感じがするけど。

呆れる僕に構わず、鈴木君は話を続ける。

「青春したいという気持ちはあるのだが、俺はバイオリン作りで生計を立てるつもりはないし、最近の図書館では貸出カードは廃止されている。ならば別の青春をと思い、現在模索中だ」

「僕に青春が何か聞いたのは、そのためだったんだ」

「いかにも。しかし、それだけではない」

「他にも何かあるの？」

鈴木君は突然、僕の手を強く握った。

「佐藤氏よ、氏は俺と同じくクラシクの境遇にある」

「う、うん、さっきそう判明したね」

「先に待ち受けるのは、空虚な老後だ」

「うっ……」

「ならばどうだろう、ここは互いに協力しあい」

鈴木君の手に一際強く、力が籠もる。

「青春しないか？」

プロローグ（後書き）

どうも、長谷川です。

いつもはショートショートばかり書いているのですが、ふと思い立って連載小説というものに挑戦することにしました。

あまりにも不馴れな形式ですが、なんとか完結まで漕ぎ着けるよう頑張りたいです。

どうか暖かい目で見守ってやってください。

では、続きが早く出せることを祈って。

届け、電波。

るるるるるるらるるるるる。

1. おお、友よ。

「作戦会議だ」

「えつと……」

「最終目標は青春するで決定だが、そのためには何をすべきか模索する必要がある」

「鈴木君？」

「ただし、何でも闇雲に試せばいいわけではない。我々に与えられた期間は、決して長くはないからだ」

「鈴木君！」

「む、先程からなんだというのだ。これから大事な話し合いをしようというときに」

「あのさ、もつと大事なことがあるんだけど」

「ほう、崇高なる目標を達成するべく行われる話し合いよりも大事なことだと？ 興味深いな、話してみてくれ」

「うん、えつとね、僕さ、まだ返事してないよね」

僕の言葉に鈴木君は口をぽかんと開けて固まる。眼鏡までずり落ちていた。

「佐藤氏よ、わざわざそんなことを言うとは、まさか協力を断るというのか？」

「うーんとさ……、僕が協力したとしてもさ、僕達ふたりじゃ青春するのは無理だと思うんだ」

「何故にそう思う」

「だって、もう十一月だよ。入学してから四、五、六……、八ヶ月も経ってる。クラスの立ち位 置をこから上げるのは無理だし、今更になって部活に入るのは辛いよね」

「ふむ、それはその通りだ」

鈴木君はずり落ちた眼鏡を直す。

「つまり佐藤氏は、どうせできないのだから、はじめから諦めてい

た方が傷は浅くて済むと言いたいのだな」

「そこまでは言っていないけど、でもまあ、そうなるのかな」

さつき鈴木君に自分達はくだと言われるまで、クラスの立ち位置なんて気にしたこともなかった。でもそれは、気にしなかったんじゃないくて、気にしないようにしていたのかもしれない。

Cという立ち位置はしつくりくるけど、少しだけ悔しくもあった。AやBの人達が羨ましい。

こんな思いをするくらいなら、ずっと気にしないままでいたかった。

鈴木君に協力して青春を探せば、もつともつと嫌な気持ちを味わうことになると思う。

青春が何なのかわかるたびに、それとは縁遠い自分を実感することになるから。

この話題はもう終わりにしたくて、僕は机からライトノベルを出す。

でも、ライトノベルはまたもや鈴木君に取り上げられた。

「佐藤氏よ、青春に脚は生えていない。それでも青春から遠ざかるのは、そうして自ら背を向けて逃げているからだ」

「っ！」

鈴木君の言葉に胸が痛んだ。

「確かに我々が入学してから既に八ヶ月も時間が過ぎた。しかし、それはまだ二十八ヶ月の高校生活が残っているということだ。クラスの立ち位置だって、今年度は変えられないだろう。が、我々は後二回クラス替えを残している。部活に入れないなら、その時間を趣味にあてればいい」

鈴木君は自分の胸に手を当てる。

「自分の惨めさを知るのは辛いだろう。しかし、それはけして無駄にはならない。少なくとも、老後にあの時は辛かったと思いつくことができるではないか」

「でも……」

「佐藤氏」

「うー……」

力強い眼差しを向けられながらも、それでも僕が頷かずにいると、急に鈴木君の肩から力が抜けた。ふうと息をつき、僕に背を向ける。「そうか、佐藤氏がそういう態度であるならば、こちらも相応の態度をとらせてもらおう」

「相応の態度？」

「絶交だ」

「ぜつ、絶交！？」

驚く僕に、鈴木君は淡々と語る。

「佐藤氏は、この俺と青春を探したくないと言う。しかし、俺は一人になっても青春を探す。となれば、交流を絶つしかあるまい」

「そんな……」

「言っておくが、俺には友達らしい友達は佐藤氏しかない。佐藤氏と絶交した俺は、体育の時間にペアを組めと言われても一人ぼつねんと立ち尽くすだけだ。その原因を作った佐藤氏は、そんな俺を見て嘲笑うのだろうか？」

「う、うー……」

鈴木君は肩越しに、恨めしそうに見てくる。僕が目を逸らしても、刺さるような視線を感じた。

たまらずにライトノベルを開いて顔を隠す。

「じ」

効果音まで追加された。

「……はあ、わかったよ鈴木君。協力するから、それやめて」

「おお、我が友よ」

「簡単に絶交とか言えるような薄っぺらい友だけだね」

「何を言う。親しくなければわざわざ絶交などと宣言しないだろう？」

胸を張ってそう言う鈴木君。なんとなく照れくさくなって、僕はライトノベルに目を落とした。

2・帰宅部レギュラー

もの見事に鈴木君の策略に嵌った僕は、二人で青春を目指すことになってしまったのだけど、

「さて、何をすればいいのだろう?」

「うーん……」

いきなり行き詰まっていた。

若い頃はこういうことをした。だから青春だった。

そんな話はよく聞くけれど、青春がしたいから何かをするというのは聞いたことがなかった。

二人でうんうん唸りながら考えても、何も思い浮かばない。

「ねえ、やっぱり青春しようなんて、無理なんじゃないかな。何もアイデアが出てこないんだけど」

「佐藤氏、そうしてすぐに諦めるのはよくないぞ。まだ考え始めて三時間ではないか」

「もう三時間だよお……」

じきに冬が来るとあり、陽はとつくに落ちて、窓の外はすっかり暗くなっていた。それでもグラウンドでは陸上部や野球部が走っているし、遠くからは吹奏楽部の演奏が聞こえてくる。

「そういえば、いつもは授業が終わったらすぐに帰るから知らなかったけど、こんな時間になっても学校に残ってる人って多いんだね」

「む、言われてみれば確かにそうだな。普段の俺ならば、既に夕食すら済ませてパソコンのディスプレイにでも向かっている時間だというのに」

「あー、僕もそんな感じかなあ」

「待てよ佐藤氏、もしかするとそこに手掛かりがあるのではないか?」

「手掛かり?」

鈴木君は黒板の上の時計を指す。

「我々は普段、ホームルーム終了後五分と経たずに学校を出る。しかし、その他多くの学生は部活、委員会、勉強、友人との歓談などの理由で数時間に渡り学校に居残る。ここに大きな差が生じるのだ」
「それはわかるけど、青春とどんな関係があるの？」

「佐藤氏、小説やアニメなどで最も青春イベントが発生するのはどこだ？」

僕は今日持つてきているライトノベルの内容を思い返す。平凡な高校生の主人公が、ヒロインと出会うことで様々な事件に巻き込まれていくというよくある話。その舞台は。

「合点がいったようだな。そう、学校だ。それも、放課後が多いように感じる」

「つまり、僕達が青春と縁が無かったのは、青春イベントの起きやすい放課後の学校にいなかったからってこと？」

「うむ、その可能性は充分にあり得る。休み時間にも言ったが、やはり我々は自ら青春に背を向けていたようだ」

鈴木君が眼鏡を上げる。

「佐藤氏よ、そうとわかれば後は簡単だ。より長く学校に留まり、青春イベントの発生を待とう。いや、ただ待つばかりでは駄目か。青春へは、自ら向かって行かなければ」

鈴木君はおもむろに鞆を持って立ち上がると、教室の出入り口へ向かう。

「行くぞ佐藤氏、青春イベントを探しに」

「え、あつ、待ってよ！」

慌てて僕も鞆を掴んで鈴木君を追いかける。

「急げ、もしかすると逃げてしまいかもしれない」

「青春には脚が無いって言ったのは鈴木君だよ」

「む、そうだったな　　つと」

教室から廊下に出てすぐ、鈴木君は人とぶつかりそうになった。

「危ないな、しっかり前を向いて歩けよ……って、なんだ？　珍しいのが残ってんな」

それは担任の先生だった。

「これは失礼しました。お互い怪我などなくて何よりです」

「あ、ああ、そうだな」

折り目正しく頭を下げる鈴木君に、先生は少したじろいでいた。

「それでは、我々は急ぎますので」

「おう、急いで帰れ。もうすぐ下校時刻だからな」

先生の言葉に、早歩きをしていた鈴木君がぴたりと止まった。それから、錆び付いたブリキの人形のような動きで振り返る。

「き、教諭……、今、何と？」

「ん？ もう下校時刻だから帰れと言ったんだが」

「下校、時刻、だと……？」

鈴木君は膝を床に着きうなだれた。

「なんとということだ。完全に失念していた……！」

先生は怪訝そうな顔を鈴木君に向ける。

「どうした鈴木？ 普段からおかしなお前だが、今日は一段とおかしいぞ？」

「酷い言われようだった。」

3・青春ノート

一晩経ったら案外飽きてるんじゃないか。

そう思っていたのだけど、教室に来た鈴木君は開口一番こう言った。

「佐藤氏よ、青春へ向かう良い案は浮かんだか？」

僕が思っていたよりもずっと重症だった。

鈴木君の目の下には大きな隈ができています。きっと、一晩中青春する方法を考えていたんだろう。

それに対して僕は、日付が変わる前にはとっくに眠っていた。もちろん青春のことなんて、何も考えていない。

「あはは、な、何も思い浮かばなかったよ……」

「ふむ、やはり一晩考えるくらいでは駄目だったか」

「そ、そうだねー」

「かくいう俺も、これといった案は出なかったからな。気に病むことはない」

「……ありがとう、ごめん」

気遣ってくれる鈴木君に申し訳なくて顔が見られず、僕は机に目を落とした。鈴木君はそんな僕の動きなんて気にもとめず、話を続ける。

「しかしだ、ただ悩み続けるのは時間の無駄だからな、代わりにあるものを作ってきた」

鈴木君は鞆を開け、一冊のノートを出した。

「さっそく中を見てくれ」

「いいの？ それじゃあ……うわ」

差し出されたノートを開き、僕は思わず声を漏らした。ノートのページが、几帳面な角張った文字で埋め尽くされている。それも、ノート一冊分丸々だ。

「何か参考になるのではないかと、あらゆる作品の青春している場

面を書き出してみた」

「これを一晚で……」

改めて、鈴木君がいかに本気で青春を目指しているかがわかった。その直向きさに、僕は呆れてしまった。どんなに必死になっても、青春するのは無理だと思う。それでも、鈴木君が諦めるまでは付き合っただけでもいいんじゃないか、そう思えてきた。

どうせ、他にすることなんて無いのだから。

僕は少しだけ気持ちを入れ替えて、ノートの文字に目を通した。

「えっと……、みんな夕日に向かって走る」

「スポーツもの一場面として、古くから見られるだろう？」

「そういえばよく見るね。青春って感じがする」

「うむ。ただ、これには一つ疑問がある」

「疑問？」

鈴木君は腕を組んで、眉間に深い皺を寄せる。

「なぜ夕日に向かって走るのか、目的がわからないのだ」

「あー」

「多くの場合、突然誰かが『あの夕日に向かって走ろうぜ！』などと言い出し、それに載せられてというパターンだ。目的は一切不明。俺にはあれで青春を感じることはできない気がする」

鈴木君の言う通り、夕日に向かって走るのには青春っぽいけど、同じことを僕がしても青春にはならないと思う。ただ疲れて終わりそうだ。

「案外、本人達もあのシーンの後には、何故あのようなことをしたのか首を傾げているのかもしれない」

「あはは、それはむしろ見てみたいや」

「まあとにかく、この『夕日に向かって走る』は実践するのは簡単だが、青春へ向かう効果は低いだろう」

「そっか」

鈴木君はやれやれと首を振る。

「他には……」伝説の桜の木の下で告白される『」

「学園もので王道の告白シーンだ」

「王道だけど……この学校、桜の木が無いよ」

「うむ、四年前に雷が直撃して倒れたと聞いている」

「じゃあ、試せないよね」

「試せないな。まあ、桜の木があっても、我々が告白されるなどありえないが」

「僕の分まで完全否定するのはやめてよ」

確かに鈴木君の言う通りなただけ。こうまではっきり言われると、さすがに傷付く。

それからざっとノートを見てみるけど、ほとんどフィクションならではのものばかりで、試すのは難しそうだった。

「佐藤氏よ、やはり青春とは尊いものなのだな」

「自分との縁遠さに、なんだかむなしくなるね」

「うむ。しかし俺は諦めはしない。数は少ないが、我々でも試せるものはあるのだ。可能性がある限り、挑み続けようではないか！」

「こら鈴木、ホームルーム始めるから早く座れ」

いつの間にか先生が来ていた。他の生徒はもう席に着いていて、否応なく鈴木君に視線が集まる。

「む、これは失礼しました。では佐藤氏、放課後には早速挑戦するぞ」

そそくさと席へ向かう鈴木君。

こうして、僕と鈴木君の青春探しが始まった。

4・語らい

僕は廊下を注意深く見回し、誰もいないことを確認する。それから後ろで待つ鈴木君に、手を上げて合図した。

鈴木君は頷き、足音を立てないよう、上履きを手に持って階段を駆け上がる。

もう一度僕は廊下を見るけど、やっぱり誰もいない。上履きを脱ぎ、鈴木君に続いた。

階段を踊り場まで上がった先にある薄闇に紛れ、鈴木君は僕を待っていた。

「ふむ、思っていたよりもずっと簡単だったな」

「ねえ、ここまで来て言うのもあれだけどさ、やめない？」

「今更何を言う」

「だって、屋上は立ち入り禁止でしょ」

鈴木君と僕の青春探し。

その第一回目の活動は、鈴木君の独断で『夕暮れの屋上で語らう』に決定した。

「記念すべき我々の初活動だ。細かいことは気にするな」

「でも見つかったら……」

「それもまた青春への足がかりだ」

「前向きに考えすぎだよ」

鈴木君は眼鏡に指をかけて、にやりと笑みを浮かべる。

「これも青春に近づいているからかもしれないな」

「初めての活動でいきなり!？」

「ふむ、さすがにそれはないか」

「そんなにすぐに見つかるなら、誰も青春したいなんて思わないんじゃないかな」

「まったくその通りだ。俺としたことが、危うく虚構の青春に満足するところだった」

「……虚構の青春ってなに？」

「はっはっは、佐藤氏よ、真の青春を求め屋上へ向かうぞ！」

鈴木君は上履きを僕に背を向けて、残りの階段を駆け上がる。

「待ってよ、虚構の青春ってなに？」

「佐藤氏よ、それ以上は勘弁していただきたい。俺にだって、最低限の羞恥心くらいあるのだ」

僕から逃げるように、鈴木君は一段飛ばしで上りきり、その勢いのまま屋上への扉を開け放った。

薄暗い階段に慣れていた目に西日が入り、目が眩んで何も見えなくなる。

「うっ……目が」

「空飛ぶ島の王のようだな佐藤氏よ」

「鈴木君は大丈夫なの？」

「うむ、開ける瞬間に目を閉じていた」

「こうなるってわかってたんなら、僕にも声をかけてよ」

「なに、ちよっとした仕返しだ」

「うー……、気になったから聞いただけなのに」

「無自覚の悪意とは怖いものだな」

そんなやり取りをしている間に、目が明るさに慣れていく。

はじめに、眼鏡に指をかけてにやけている鈴木君が映る。それから、次に目に入ったものに僕は息を呑んだ。

「佐藤氏よ、これは見事なものだな」

「うん……」

この学校は小高い山の頂上にある。だから学校の屋上は、この町で一番高い所になる。

視界を遮る物といえば、屋上を囲うフェンスくらいだ。

「すごい」

僕達の前には、夕日に照らされた町が広がっていた。

「この美しい景色を背に語らうのは実に青春っぽくないか？」

「青春っぽいね」

「ではさっそく語らおうではないか」

「うん。でも、何を？」

「ふむ、そういえば決めていなかったな」

鈴木君は腕を組んでしばらく考えると、夕日を反射して輝く眼鏡を上げた。

「よし、では何を語らうか語らおうではないか」

「それじゃ青春っぽくないよ」

「うーむ、青春するために語らうことを語らうと青春ではなくなるとは、なんたる本末転とうえ……、うえ……、うえつくしよん！」

鈴木君は体をくの字に折り曲げて、豪快にくしゃみをした。

「あー、少し体が冷えてきたようだ」

言われてみれば、確かに鈴木君の頬は夕日のように赤くなっていた。たぶん僕も同じだ。

「佐藤氏よ、ここは予想を遙かに超えて寒い。一時撤退も手かもしれない」

「そうだね。このままじゃ風邪ひくかも」

結局、僕達は何も語らうことなく屋上を後にした。

階段降りながら鈴木君は一言、「青春イベントは季節を選ぶのか」と呟いた。

5・カラオケ若葉マーク

「あゝあゝ、ふむ、これがエコーというやつか。気持ちいいような悪いような、なんとも奇妙な感覚だな」

「うん、すごく変な感じだね」

マイクを片手に鈴木君は何度も「あゝあゝ」と繰り返す。

僕は、青春探し二回目の活動としてカラオケに来ていた。

「学校帰りにカラオケとは、なんとなく青春っぽいな」

「昨日の『屋上で語り合う』っていうのほどじゃないけど、確かに青春っぽいかも」

「そうだろう、そうだろう」

「鈴木君、すっかり気に入ったみたいだね」

「うむ、くせになる。カラオケに来たのは初めてだが、こんな物があるならもっと早く来ればよかった」

「あ、鈴木君もカラオケ初めてなんだ。僕もだよ」

「はっはっは、我々は授業終了即直帰の帰宅部エースだからなあ」

「あれ？ そういえば、こうして二人で遊ぶのも初めてじゃない？」

僕と鈴木君はどちらも電車通学をしているから、駅まではだいたい一緒に帰る。その途中で買い物のために本屋やコンビニに寄ることとはあるけれど、遊びに行ったことは一度も無い。

「佐藤氏よ、もしかすると我々は知り合い以上友達未満の関係だったのかもなあ。しかし案ずるな、今や我々は二人でカラオケに来る仲だ。これを友達と言わずして何と言おう」

「鈴木君」

「おお、心の友よ」

「なんか良いこと言ってるみたいなのに、エコーのせいで台無しだ」

「うむ、俺もそう思う」

鈴木君はマイクのスイッチを切り、眼鏡を上げた。

「さて、せっかくのカラオケだ。いつまでも話していないで、歌うとしよう」

「うん」

「……」

「……」

「……ん？」

「うーん……」

「なあ、佐藤氏よ」

「なに？」

「曲を入れないのか？」

「鈴木君こそ」

「はっはっは、記念すべき一曲目は佐藤氏に譲ろう」

「青春したいっていうのは鈴木君の夢でしょ。遠慮しないで歌ってよ」

「いやいや、佐藤氏」

「いいから鈴木君」

「……」

「……」

しばらくの間、二人で作り物めいた笑顔を向け合う。

「佐藤氏よ」

「うん、鈴木君」

言葉にしなくても、互いに何を言いたいのかがわかる。

僕も鈴木君も、カラオケ初体験だ。

つまり、音楽の授業を覗いて人前で歌うのは初めてだった。それも、音楽の授業なら大人数で歌うから、小さい声で歌って逃げられるけれど、今は二人つきり。

はつきり言って、恥ずかしい。

「佐藤氏」

鈴木君が僕の胸にマイクを押しつけてきた。

「鈴木君」

僕はそれを両手で押し返す。

「佐藤氏」

「鈴木君」

「佐藤氏！」

「鈴木君！」

互いに譲り合いを譲らない。

「うむ、このままでは一向にカラオケが始まらないな」

「そうだね」

「話し合いで決まらぬならば、方法は一つしかないだろう」

そう言っつて鈴木君は握り拳を作った。

「鈴木君、やる気だね？」

僕もそれに応えるように拳を握った。

こうなつたら、方法なんて選んでいられない。

「行くぞ佐藤氏！」

「行くよ鈴木君！」

二人同時に大きく振りかぶり

『じゃんけん、ぼんっ！』

「ぬわーーーーー！！」

「やった！」

じゃんけんの結果は僕が『グー』、鈴木君は『チヨキ』だった。

「この俺が、負けるとは……」

「さ、鈴木君」

僕は鈴木君にマイクを差し出す。鈴木君はマイクをきつく一瞥し

てから、奪い取るように握った。

「こうなつてはしかたあるまい。全身全霊でもって歌わせていただ
こう」

鈴木君は機械を操作して、記念すべき一曲目を入れた。
流れ出すイントロ。

それに僕は聞き覚えがあった。

郷愁の歌。

鈴木君が青春を目指すきっかけになった映画の主題歌だ。

「
全身全霊をと言っただけあって、鈴木君の声にはたっぷりと気持ち
が込められているように感じた。

「~~~~~」

エコーを響かせて、一曲目が終わる。

僕は拍手を送った。

「ふむ、歌い出しこそ恥ずかしいが、それに慣れてしまえばかなり
気持ちいいぞ。エコーだけでなく、カラオケそのものもくせになり
そうだ」

「へえ、それじゃあ僕も歌おうかな」

「ああ、そうするといい」

*

「ありがとございました」

店員の声を背中に受けて、僕達は店を後にした。

冷たい空気が心地よい。

空を見上げれば星が出ていた。

鈴木君が隣でほおと白い息を吐く。

「ぞうじょ、つぎにがらおげにべるどきはじがんにぎをじげんじつ
ぞうだね、ずずぎくん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0734z/>

それはまるで星のよう

2012年1月2日10時47分発行